

# 2018年度 センター試験 倫理、政治・経済（本試験） 分析

## 全体概況

試験時間 60分

大問数・解答数	大問数：6題	解答数：36問	
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	○ 変化なし ● やや易化	○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	○ 変化なし ● 減少	
出題分野の変化	○ あり	● なし	
出題形式の変化	○ あり	● なし	
新傾向の問題	○ あり	● なし	
<b>総評</b> 大学入学共通テスト試行調査の「現代社会」に見られたような長大な資料問題は存在しなかった。例年通り単なる知識問題にとどまらず、資料読み取り分析問題などを織り交ぜて幅広く出題されている。出題分野は「倫理」から50点分（解答数18）、「政治・経済」から50点分（解答数18）と均等に出题されているが、「倫理」は昨年の解答数に比べると1問減少している。また、昨年出題された見開きで1問かつ選択肢の1つが4行といった手間のかかる資料読み取り問題がなくなったため、やや易しくなった印象を与えている。すべての設問は単独科目の「倫理」・「政治・経済」からの抜粋で構成されているため、過去問学習では単独科目の「倫理」・「政治・経済」に取り組むことが大切である。選択肢は4択を基本としつつも、6択・8択も存在するため正確な知識が要求される。ただし、センター試験の正誤問題は、誤文が一見して誤りと気が付くように作成され、私大で出題されるような正誤判断のポイントが曖昧な設問は存在しない。知識の確実な習得をしたうえで、総合的な分析・読解力が求められるのがセンター試験である。			

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第1問	高校生の会話文を通じて、青年期の心理や現代社会の諸課題を問う。	14点	ハヴィガースト、オーウェン、マザー=テレサ、キング牧師、マズロー、国境なき医師団の資料読み取り、センの順に問う。ハヴィガーストとともに問われたオルポートに戸惑った受験生がいたであろうが、誤文が明白なので解答できる。
第2問	日本思想の歴史的展開を示すリード文を素材にして、日本思想を中心に思想の源流も問う。	18点	日本の神話や伝承、八正道、日蓮、貝原益軒、富永仲基、ブッダ、プラトン、朱熹(朱子)、三宅雪嶺、本文の趣旨問題の順に問う。日本思想を軸に思想の源流を合わせて問うのは、昨年度と全く同じであった。
第3問	「遊び」をテーマとしたリード文で西洋近現代思想と思想の源流を合わせて問う。	18点	パウロ、ロック、コペルニクス、ニュートン、カーソン、遊びの社会的性格についての資料読み取り、ブッダ、イスラーム、ホメロス、聖書、本文の趣旨問題の順に問う。1つの設問に多様な時代の多様な思想家が登場するので切り替えが肝要となる。
第4問	国家の役割の変化を示すリード文で政治・経済の各分野を総合的に問う。	22点	夜警国家、基本的人権の分類、米国と英国の政治制度、法の支配、需給曲線、ローレンツ曲線、電力問題、安全保障問題の順に問う。2016年の電力小売事業自由化や2015年の安全保障法制といった時事的要素の高い出題に注目したい。
第5問	格差をめぐるリード文を素材にして、政治・経済の各分野を総合的に問う。	14点	トレード・オフ、ベーシック・インカム、フェアトレード、エネルギー構成比の資料問題、フィラデルフィア宣言、教育費の資料分析を問う。エネルギー構成比の資料問題が知識問題である一方で、教育費の資料分析は純粋な読み取り問題である。
第6問	女性の社会参画をめぐるリード文を通じて、政治・経済の各分野を総合的に問う。	14点	女性の社会進出を示す資料問題、国会および緊急集会、性差別、労働者派遣法、パートタイム労働法、高年齢者雇用安定法、最高裁判所の違憲判決の順に問う。資料問題は各国の政治制度に関する知識を前提としたものであった。

